洛友會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

謹賀新年

昭和53年元旦

洛友会役員

会長　松田長三郎
副会長　芦原義重
〃　巽良知
〃　本多静雄（中部支部長）
〃　平井寛一郎（東北支部長）
〃　宮田秀介（九州支部長）
〃　真田安夫（中国支部長）
〃　金井久兵衛
〃　大谷泰之
〃　田中哲郎
東京支部長　富岡正春
関西支部長　阪本勇
北陸支部長　荒井武治
四国支部長　藤本悟郎
北海道支部長　池内義則
常任幹事　山本茂雄
〃　吉田洪二
〃　近藤文治

京都大学
電気関係教室
教官一同

関西電力株式会社

大阪変圧器株式会社
専務取締役　清原　道也

財団法人　関西電気保安協会

栗原産業株式会社
代表取締役　栗原　英三

株式会社　島津製作所
取締役社長　上西　亮二

京阪電気鉄道株式会社

立石電機株式会社

住友電気工業株式会社

日新電機株式会社

謹賀新年

昭和53年元旦

フジテック株式会社

松下電器産業株式会社
電動機研究所
所長　片鎌　秀雄

三菱電機株式会社
大阪営業所
取締役所長　大屋昭三郎

松下電子工業株式会社
社長　三由　清二
大阪府高槻市幸町一番一号

近畿電気工事株式会社

近畿日本鉄道株式会社

大和電機株式会社
取締役社長　十倉　正三

株式会社
シンコーメタリコン
代表取締役　立石　亨三

愛知産業株式会社

高周波熱錬株式会社

日比谷総合設備株式会社
取締役社長　鈴木　戩吉

日立化成工業株式会社

日本建鉄株式会社
石川　辰雄

北陸電力株式会社
取締役会長　金井久兵衛

北陸電力株式会社
副社長　森本　芳夫

富士通株式会社

日立製作所
四国営業所
〒760 高松市亀井町7番地
(電気ビル)
電話(〇八七八)三一二三一

四国企業株式会社
相談役　渡部　兼雄

四電エンヂニア
リング株式会社

財団法人
応用科学研究所

年頭に際して

洛友会会長
大正6年卒　松田長三郎

新年お目出とう御座います。会員各位の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。

□さて本年は、わが電気工学科の創立80周年になります。京都帝国大学はその前年に創立せられ、昨年京都大学では創立80周年の祝賀会が行はれました。東京大学も創立100周年に当りましたが、祝賀行事粉砕を叫ぶ一部学徒に妨げられて、神田の学士会館で辛うじて祝賀行事が行はれたと、新聞は報じていました。大学が学問研究の府であることは昔も今も同様でありますが、大学人の意気込みには大分変化がありますし、現在の学部は多分に高等学校化している嫌いがあります、これからは、大学院及び研究所の充実により、真の学術の蘊奥を究むむる静かな学園に、早く立ち直ってほしいものと思います。

□本年度の洛友会会員名簿は、既にお手許に届いていると思います。この行き届いた名簿は、応用科学研究所の吉田洪二・山本茂雄両氏並びに関係者の一方ならぬご努力によるものでこの機会に厚く御礼を申し上げます。この名簿を通覧して、今更ながら驚嘆し且つ誇りに思いますことは、会員各位が社会各方面に活躍されて、我国の経済成長・学術技術の発展にそれぞれ貢献されて来られたことが想察されることで、何とも頼もしい限りであります。明治34年第1回の卒業生6名を出してから、既に4655名を数え、講習所卒業生1284名を加えると実に、計5939名の蔚然たるこれ等の人達の御活躍を思い、感謝感激の情に堪えぬ次第であります。唯42年卒業の方までは、全部亡くなられ、その他多数の会員を喪っていますが、ご冥福をお祈りするとともに、何事も健康第一でありますから、会員各位の御健康をお祈りする次第であります。

□今年は深刻な不景気の年のように予感せられていますが、終戦直後の、名状すべからざる苦難を経て、朝鮮戦争後の神武景気、更に岩戸景気、と云はれた有頂天の好景気時代を超え、一朝にして又非常な不景気に見舞われたことがあり、悲喜こもごもの体験を経験して来ている我国は、今や国民総生産GNP8000億ドルに達し、西側諸国では、米国に次いで世界第2位に躍進し、貿易は愈々伸びて、米国のみならず、ヨーロッパ各国(EC)からも、貿易の収支不均衡是正の集中攻撃を受けると云う、四面楚歌の声は、正に第2次世界大戦前夜のような感に打たれます。これらの成果は、我国民の優れた能力、勤勉努力、更には海外至る所に駐在する多数の商社マンの営々努力の結果であって、ぼう大な貿易収支の黒字は我国の輸出産業力の充実の賜物であって、ここ50年来、海外事情を見聞して来た筆者にとって、実に今昔の感に堪えぬものがあります。旧臘の日米経済会議の際モンデール米国副大統領は、この会議が「世界中の注目の的となっている」と云われたが、現在1ドル240円を割る円高などを併せ考えると、我国の世界経済界に占める重みを、今更ながら痛感するのです。

□これについて近頃、ふと思い出しますことは例へば英国では、所謂英国病は病こうもうに入った感じで、スト続発甚だしきは消防士のストが何週間も続き、火災があっても消防せず、既に60人以上の焼死者が出ていると伝えられました。これに反し韓国では、数年前見学しましたが、最近視て来られた一本松珠璣博士によると、準戦状態にあるとは云え、更に重い国防費の負担に堪えながら、週50時間、1日24時間の労働。土曜日も平常通りとして、営々として国力の充実に励んでいます。我国に範を採った軽工業は、既に我国の強力な競争相手であるし、造船の如き次から次とドックを建設し、我国造船の現状に引き換え、不況知らず、重化学工業も目覚ましい発達を遂げつつあると聞きます。我国が明治以来欧米先進諸国に追いつき追い越すに至ったと同様に、韓国・台湾等の中進国や発展途上国は、我国の先例に見習って真剣な努力を重ねています。栄ゆる国、衰える国彼此対照して我国も所謂日本病に陥らぬように、今こそ精神的にも物質的にも一層引き締まって頑張るべき時でありましょう。

□今年の課題、やはりエネルギーや食糧問題、景気浮揚、更には現在の経済情勢では先進国としては極めて高い、来年度経済成長率7%の達成などむつかしい問題が山積しています。今年が皆さんにとっても、みのり多いお年でありますように、更には世界平和、人類の幸福増進の年でありますように祈念して擱筆致します。

姑蘇域外寒山寺

日本建鉄
相談役
大正15年卒　石川辰雄

某日、頼山陽先生は珍しく忙中に閑を得て、徒然なるまま酒杯の間に清談をと、飲み友達の墨客の宅を訪ねた。勝手知ったる先とて庭先からノッソリ座敷に廻ると、既に先客が二人いて、かなりメートルが上っている様子であった。そこへ有名な山陽先生を迎へたのだから、座は一段とはずんだのは素よりである。

杯を重ね談論風発の中で山陽は先客の一人は気心の知れた旧知だったが、もう一人は初対面で、何となく尊大で自分を大きく誇示しようとする、虫の好かない奴だと思った。そこで、よしよしこいつを一寸挑発して、腹の底をさらけ出させてやろうと、何かいたづらを仕掛けるきっかけを待つことにした。

席上先客には立派な膳が配されてあり、見れば刺し身や大きな焼き魚など、珍味が並んでいる。それに比して不時の闖入者である山陽自身の膳の上には、応急のオツマミしか乗っていない。面白い、一つこの膳羞を話題に取り上げられないものかと、山陽は莫然と心

の中に思った。

折もよし、尊大の夫子は相手が山陽先生というので、大いに背伸びして、つまらない詩談を吹っかけて来た。曰く、『張継の「月落ち烏啼いて霜天に満つ、江楓漁火愁眠に対す」という詩は、一説には「月は烏啼(山)に落ち」と読んだ方が意味に一貫性があるといわれていますが、先生はどちらをお取りですか。』といい出したのである。しめた面白くなったぞと山陽は、網に自分からかかって来た相手を、しっかりと手もとにたぐり込むこととした。

だが、素知らぬ顔で山陽は、『そろそろ、私もさっきから偶然その詩のこと考へていたのですが、その後段に「姑蘇城外寒山寺、夜半の鐘声客船に到る」という句があるでしょう。その姑蘇城外の「蘇」という字は、魚が左だったか禾が左だったか、どちらだったかと、フト思い迷っていた所です。』と、とぼけた風情でポソリといった。

尊大夫子はここぞとばかり満面喜悦、『これはこれは、山陽先生とも思へぬことを仰有る。あの字は魚は左でも右でも、どちらでもよいのですよ。ほかにも和を咲と書いたり、秋を烄とかいたりするではありませんか。』と。天下の頼山陽先生から美事一本取った喜びに得意満面、傲然と脊骨を伸ばして坐り直した。あわれ自らが山陽の魚籠の中に、完全に捕らへられたことも知らないで。

山陽この時少しも騒がず、いたづらっぽい目をクリクリと動かして、『そうですか、魚は右でも左でも、どちらでもよいのですね。』と念を押した上、サッと猿臂を伸ばして、尊大子の立派な焼き魚と、自分のオツマミ(禾、枝豆か何かの穀物)とを、右と左に入れ替えてしまった。

一座大爆笑。この機智にさすがの尊大子もすっかり兜をぬいで、即座に素っ裸の気持になって、山陽先生の胸中に飛び込んで来たというめでたし芽出度しの話。

五十余年前に読んだ薄田泣菫先生の「茶話」の、筋を思い出して焼き直してみたものである。

追想

北陸電力
取締役会長
昭和5年卒
金井　久兵衛

洛友会の新しい会員名簿が届いたので、同年卒業の所を拡げて見ると約半数の友人が既に鬼籍に入られて居る。私は大正十五年四月に憧れの大学の電気工学科に入れたので、昭和四年三月には卒業出来る筈であったが、一年休学して昭和五年の三月に出た。

それは、入学した年の夏休みを終えて二学期に郷里から出京して後のある日曜日に、友人数名と男山八幡宮にお詣りした後、舟で淀川下りをして秋晴れの一日を楽しく過した後、約一週間を経て四十度の高熱を発し、全身が堪え切れぬ痛みに襲はれ、丁度下宿のま向いに医師が居た事とて診察を受けると、普通の風邪でないから直ちに大学病院に入院せよと注意されて、早速入院するとワイル氏病と診断を下され、重症者病棟に入れられて、「ワクチン」を注射するからとの事であったのに、その医者が実施せぬまま医局の懇親会に出かけて行ったまま戻らず、私はその夜大出血をして(鼻)仲々にとまらず従って血圧も下って来るのである。友人達の好意また医局の配慮で勿論止血薬の注射や二時間間隔の強心薬注射その他の処置を受けたが、一晩無事に過し得るのだろうかと意識のみは返って冴えた私は死の厳頭に立った想で、重症病棟の事とて向いの部屋の深夜の時ならぬ余配や、パタ〳〵と急ぎ足で通る足音と間を置いて通る運び車の音に耳を聳てゝ居た。幸に危機を脱してある程度の体力にまで回復したので、郷里で静養の時を過す為に、大学を一年休学したのである。

私事のみを書いて恐縮至極であるが今一つ、昭和四年の十二月、来春はいよ〳〵卒業ゆえにと友人と二人で第二学期の試験の終った日に、京都名物の南座の顔見世興業を観に行って居た所、休憩時間(幕あいの)に舞台上に「京大の金井様」と緊急の呼び出しの札が立てられて、聴くと「父危篤」との電報が下宿に届いた由なので早速南座を退出して、夜汽車に乗り込み金沢の大学病院に入院治療中の父に翌朝会う事が出来たが、私を待って居た様に正午頃遂に他界された。

大学在学中の想出は前述の様な淋しさや悲しさのこもる事の外に多くの楽しい又喜ばしい想があるのに、殊に青柳先生を筆頭に諸先生の教導によって智識と共に人としての教養を与えられた数々の想があるのに、殊更に前述の私事のみを書いて了った。

然し病気休学の為に私は昭和四年卒と昭和五年卒の両年度の友人を持った。そしてその後の社会に出てからの歩みに、温かい友情に恵まれて今日に到った。曽って昭和四・五両年の卒業生が能登めぐりを企てた時は、北陸の住人としてお世話をして想い返しても愉快な二三日をも持った。

順序が逆になるが私達が学窓を出た昭和の初期は不況のさ中であって、日本の企業が漸く定年制を取り入れる、又廃案にはなったけれど政府が官吏減俸案を国会に出すと云う始末でもあった。然し電気工学科の就職は割合順調で私も亦郷里を離れた所に職を得る見通しで居たのであるが、前述の父の他界の故に家庭内の事情があって富山に落ち着かざるを得ぬ事になったのである。

それ故に多くの友人を失った身で尚一応無事で日々を過して居る我が身を省る時、前述した二つの事柄が大きな因となって居ると思はれる。自らの歩みを想う時、時には自身の力で拓き来た様に思い上る事もあろう。又悲を嘆つ時には弱い人間の性から他にその因を求める事もあろうが、この頃は自身としては気付かぬが大きな力の流れの中に運ばれて今日に至って居るように思うのである。

現下経済界に於て又社会全体に於て、極めて厳しい環境下にあって、我が国として非常な事態に置かれて居ると思はれ、直接関係深い事柄には苦慮をして居る事であるが、丁度京大を卒業した昭和初頭の事をふり返り見る事が多い。

永い年月の間には勿論景不況の繰り返しは当然として、殊に戦後の国民全体の放浪から工業的大国となったと云う自負を持った我が国が、この内外共に厳しい環境を如何に考えるか。民間がそれぞれ自助努力を傾け叡智をしぼるのは当然ながら政府に置いては思い切った政策の実施を果敢に行はれる事を望んでやまない。

そして繰り返すが、私は昭和初頭時の不況を泌々と想い返して居る。

（洛友会の新名簿で旧友達の様子を想い、往時を省て、よしなき事をとりとめもなく書きました）

文明の否定

大東電業
常務取締役
昭和9年卒
植田仲司

人類は先史時代以来数千年農耕狩猟を基とした余り変らない生活をして来たが、近世に至り、かの産業革命後二、三百年の間に所謂科学技術を縦横に駆使して近代文明を築き上げた。之によって人は坐して空中を翔び千里の彼方にあるものも眼前に見ることができる様になった。吾々はこの魔力の大きさに打たれ「これこそ人間の力」と感じ、之によってその生活や社会は永世に進展してその幸せを享受することができると考へた。

然るにここ数年どうも様子がおかしくなって来た。万物の霊長なぞといってもその運命と力には限界があり、自然や造物主からみれば鳥獣と何等変りないことが段々と判ってきた様である。

かの西遊記に三蔵法師か孫具空に「なんぢ神通力ありとすればこれより西方五万里の彼方に五本の大柱がある。直ちにそれにいたり己の名前を記して来れ」といわれた。呉空は直ちに金斗雲を呼び、之に乗って雲界の彼方に飛んでいった。暫くして彼方に五本の巨大な柱が見えたので之こそ師の言はれるものと、その柱の一つに己の名を書きつけ帰り、誇らしげにその事を報告した。三蔵法師はやおら自分の右手を呉空の前に示されるとその中指に呉空の記した己の名前が黒々と記されていた。

ここに於て呉空は釈然として三蔵法師の弟子となり、師が呪文を唱へられるとたちまちしまる鉢金を頭につけ、遠く異境に法を求める師の御伴をすることとなったということになっている。ここにいう金斗雲は飛行機か自動車の類であり、呉空は吾々人間とすれば三蔵法師である自然や神の前にはその偉大なりと見える神通力も所詮その掌の上にあることを意味し、勝手なことをすれば自然に鉢金がしまるのは公害とか環境汚染であるとすれば、現代の世相と人間の限界をよく表しているといわなければならぬ。

宇宙旅行時代というが、高度の技術と莫大なエネルギーを駆使して火星に行っても、そこには空気も水もない零下何十度で生物もいないということでは大きな失望といわなければならぬ。之に反してこの地球とは何と不思議な世界であろうか。空気も水もあり、又植物、動物、春夏秋冬があり、然も太陽より極めて適当な位置にあって温度も＋40℃から－40℃の凡そ100℃の範囲にあるということは偶然であろうか、或は造物主といわれる人格の創造物であろうかと感嘆せざるを得ない。この優れた条件のもとに、人間はその智恵により文明社会を造り又さま〴〵な価値観を定立し、然も各方面で破壊を行ってきているのではないかと危惧される最近である。

老子は二千年の昔「道の道とすべきは常の道にあらず。名の名とすべきは常の名にあらず」といい無為自然の道を説いた。誠に人間の幸せというものはその表面の形丈では判断できるものではなく難しいもので、更には現在の様な膨張した社会を本当に人間の幸福に結びつけるためには、凡ての人は粛然と襟を正して今迄とは異った事を考へなければならない様に思はれてならない。

この難局に当る日本の政治はどうか。議会制度というものも一億以上に達する大多数の社会では極めてスピードが遅く、この難局に対処するに速戦速決という訳にはいかない。随って激変する情勢に対し、後手後手に廻っていることは最近の経済運営によく表れている。次に莫大な費用がかかる。メリットを評価するとすれば之しか仕方がない。之なら一応理屈がたつという程度のもので万全といい難い。之を構成している選良は、「代議士は落選すれば唯の人」という事が身に泌みているから国家百年の大計というよりも、次の一票ばかり気にしている。随ってスタンドプレイに徹する。要は自分自身のこと丈しか考へていない。

最近の大問題の「ロッキード事件」。一国の総理大臣が五億円の金を自由にするチャンスに恵まれ秘匿できるものと信じて自由にし大部分は子分に分ち与へたものである。一年間に一万円程度の昇級しかない吾々にとってはおかしい事ではあるが、一面かの大東亜戦争時代一枚の赤紙で生活も生命も犠牲を強要されたことから考へると、大したことではない。資本主義のあちこちでは規模の大小はあるが類似的な事はいくらも行れている。それが社会の大混乱を生ずる恐れがなければ致命的なものではない。一方、之に対する議会の様子はどうか。そのことが外国の情報により明らかになったものであるのに、之こそと鬼の首でもとった様に、連日之に明けくれている。そして国民の前に調査能力の不足と頭の切れの悪いのを露呈するのみであった。之皆スタンドプレーで、次回の一票を意識している。こんなことで国家百年の大計が議せられる訳がない。之丈評判になればもう二度とやるまい。之をどこ迄も追求したいというのは女の心理で「君困るぢゃないか」と肩を叩いて二度とその男を使はなければよいのである。

選挙して代表を選ぶことになっているが、之にも色々と問題がある。第一金がかかりすぎる。更には賢い人もそうでない人でも一票は一票である。選挙人の半数は女である。国民の半数であるから勿論のその権利が守られるべきは当然であるが、政治向きにできていない事は歪定できない。「国家百年の大計」「人類永遠の進路」と

いう様な問題を共に語るのは難しい。神は男女をそういう様に造成されたもので、結局ドラスチックな変化を忌避する傾向が表れてくる。之では急速な情勢の変化に対処して迅速な手を必要とする様なときにブレーキとなる恐れがでてくる。現代に於ては最早一大先覚者というものは決して表れないだろうし、又表れても耳をかす様にはなるまいと思はれる。凡そ現代の社会のあり方は社会全体に与えられる利益をグループによって分前を得ることに身をやつしている様に見える。それが会社であり労働組合であり医師会である。その状は恰かも「PRey」獲物に群る禿鷹が分前に狂奔しているさまを想像させる。そこに連帯性とか相互扶助というものは何もない。そのグループにとって分前を確保することはグループの生活を守る所以で自衛であって、かりに一度妥協して後退すれば、朝に一城を抜かれ夕に一国を失うという想いが先に立っている。社会全体の公正という立場から判断するのではなくグループの生活を防衛しなければ困った時に誰も助けて呉れないと考へるのは肯けないでもないが、之は相互不信というものではないか。さてこそ円為替が240円になって我国全体で100億ドルの黒字となりニコニコしている人もあろうと思はれるのに大多数の人はその恩恵に与れない。「よい時はよいが悪い時には誰も助けて呉れませんからね」という返事が返ってくる。組織のできていないサラリーマンや中小企業者というものはいつでも犠牲になる訳である。

之の様なことが当り前としてまかり通っている原因は何かと考へると、之は数の問題である。スイスの様な数百万の国ではもっと連帯性というものがでてくるし、その議決機関も青空議会といって白亜の殿堂を必要とするものでなく街角に集って相談すると聞いている。行政を行う大臣も5名位で、少いから是非は直ちにはっきりするしスピードも出てくる。更には派閥なんどいってことさらに異論を唱へたり、又他人の愚を利用してかき廻すこともできないし、第一数で物を言はせることもできない。之が一億人以上となると簡単にいかない。世論を統一するといっても衆愚にピーアールするに費用もかかるし、その手段も複雑でまとまりがつかないし、その集約に時間がかかる。報導の自由といって努力しているマスコミでもこの多数の社会でその業務を継続する為には費用も莫大にかかるので多少おかしいと思っても人気取りを意識しなければならなくなるからある一面を誇張する訳である。いつも販売部数を意識して論調を決定している内に社会的な公平な判断を狂せてもくるし又誤ったグループに便乗される様な結果となる。最近の公害補償にもこの傾向なしとしない。この様に考へると現代文明社会は昔から考へられている人間の理想郷とは段々と離れていく様に思はれる。「エルドラドの憧れ」といって理想郷は人間の希求であった。かの老子は「小国寡民、隣国、相い望み鶏犬の声相い聞こえて民老死に至る迄相往来せず」といっている。プラトンはその対話篇で理想社会として小国寡民を説き、「ひどい貧乏人もなく貧乏にせまられて仲違いすることもなかった。金銀がないので金持もいなかった。貧富が同居していない共同体では一番高貴な習慣が生れてくるもので傲慢も不正も更には羨望も嫉妬も生れないので凡て単純で善人であった」と書いている。

狩野享吉博士の紹介によると、宝暦の間、安藤昌益は一切の人間の直耕直織の社会を理想としたといわれる。今更この現代社会を元に戻すことは困難であることは自明であるとすれば、吾々は孤舟に乗って大海に出た漂泊の民で混迷の彼方に向って旅立っていく運命にある様に思はれてならない。然り。エネルギー問題や人口問題等の重大問題をかかへた人間がその英智により之を如何に解決するか誠に危惧される状勢にあるといわなければならぬ。

以上の様な次第で種々考へさせられる問題の山積するなかで、一時は大学入試に我が子に附き添う母親の様に心痛したこともあったが、所詮どうにもならないことではあり、最早定命いくばくもない身として考へることは誠に無責任ではあるが、以上の案件と隔絶して、古人の教へる花鳥風月を友として尚残された大自然の美しさとその恩恵を感受し更には神の恩寵を信じ、時には蘇東波の「赤壁の賦」でも繙いてその「斉物」の哲学にふれ、「ああいつの世でも人はこの様なものであり、之以上のものではない」と嘆じ、幸い健康にも恵れているのでその中に心豊かに余生を生きていくより外に仕方がない、と考へる昨今である。乱文多謝。

非常勤講師奮戦記

昭和33年卒（電気）
中部電力原子力室　坂入武彦

洛友会中部支部の例会で古田先輩とおちかづきになり、仕事の話などをしているうち、ある日突然に、講師をやってもらえないか、ということになった。あげくの果十数年ぶりに大学というものへ足を向けることになり、そのまま四年がすぎた。古田先輩の言によれば「企業のPRのつもりで半年単位で原子力の簡単な基礎を」ということであったが、いざ半年間の講義の重みを考えてみるとなかなかにいい加減なことではすまされず、結局原子炉物理の初歩を半年分に整理して講義することにした。

引き受けることに決ってまずとりかかったのは、当然のことながら講義のノート作りである。教科書を使うことも考えたが現在市販されているものの中にはどうも自分にピッタリしたものがなく、結局自分でノートを全部作ることにした。中心としたのはかってアメリカで一年間学んだときのノートであり、それに手持ちの参考書の内容を適宜加えることにしたが、講義をやってみてやりにくいところや、学生の反応の思わしくないところはその都度手を入れていったので、だんだんに国籍不明のものになって来た。正直のところ、これまで炉物理について勉強したり試験を受けたり、はたまた仕事

のうえでいつもお目にかかっているはずなのに、自分が講義をするという立場から改めて考え直してみると、教えようとすること全部を完全に理解しておくというのはずいぶん大変なことで、結局大学で教えることになっていちばん勉強させられたのは、どうやら他ならぬ私自身であったようだ。

学校の都合で、最初に受け持ったのが二部（夜間）の学生であった。いま考えてみても、最初のころはこちらもずいぶん緊張したし、学生のほうもそれ相応に緊張していたようで、授業中にゴソゴソする者がほとんどなかった。その後も、こちらとしてはその都度緊張を新たにしてやっているつもりなのだが、不思議なもので、こちらが馴れてくるに従って、聞いているほうもしだいにリラックスして来たようで、だんだんに行儀が悪くなって来たのはまことに妙なものである。

授業は書いたものにたよらず時たま図表を配るほかはひたすら黒板に字を書いて写させることにしたが、書きながら話をするというのはタイミングがまことに難しい。つまりこちらが字を書き終った直後は学生のほうはまだ書いているので、そんなときに何かしゃべっても上の空。かといって大半が書き終るのを待ってから話しはじめると何となくダレてガサガサとザワついたりで、そのあたりの呼吸はどうもいまだに会得できないでいる。それに、小人数のクラスの場合はいいが、多いときは百人を越えたことがあって、そんなときはいつも誰かしらゴソゴソガサガサやっていて、気にしだすとキリがない。しかし、講師をひきうけると決ったとき、私は一大決心をした。それは、いくら学生がザワついてもそれを学生のせいにせず、自分の講義が下手なのだと思うことにしよう、ということである。まあ言ってみれば一種の精神修養をみずからに課したようなもので、自分でもそれがやり通せるかどうかはなはだ自信がなかったのであるが、幸いこれまでどうにかその「誓い」を破ることなく大きな声はいちども出さずにきた。おかげで、多勢の人を前に話をするとき、ガサガソする連中が目に入ってもそしらぬ顔で平然と話をつづける術が何となく身についたような気がする。古田先輩にはまことに云いにくい事ながら、大学から月づき頂くものはいわば気休めであって、労力に対する報酬としてはゼロがひとつ落ちているのではないかと思われるほどであったが、「修業」ができたことによって十分にその償いはされているようである。もっとも、そうとでも思わなければ到底四年間も続かなかったであろう。欲をいえば、学生を自分のほうにひっぱり込むところまでゆきたかったが、これにはどうもある種の天分が必要なようで、私の凡才では到達できないものとしてあきらめることにした。

講師に出るとき、もうひとつ考えたことは、自分の一挙手一投足がそのまま自分の会社のイメージにつながるのではないかということであった。自分の会社や所属などはあまり積極的には云わないようにしていたし、大学のほうでもそれは十分に心得てやってくれたのだが、どうも蛇の道は何とやらで、いつの間にかバレていたらしい。いちどなど、二部（夜間）の学生のなかにズバリ中部電力の社員が居て、これはもうどうしようもなかった。ともあれ、いいかげんな事をすれば、やはり会社のイメージダウンにつながるのは当然で、その意味でも気を抜くことができず、これもまたひとつの「修養」をさせて貰った。事実、はじめの頃はどうやら会社のニオイがプンプンしていたようで、試験の答案に「これからは原子力の時代です。ガンバってください」とか、「ちかく原子力発電所を見学にゆきたいのでその節はよろしく」とか書いてくるのがいて苦笑したものであるが、これまた妙なことに、こちらが回を重ねるについて、その種の「コメント付き答案」がまったく出てこなくなってきたのは、しだいに会社臭の失せて来たことの証左でもあろうか。

最初の講義のとき教務係から出席簿を渡されて、出席をとるように云われたのにはおどろいた。京都大学に四年間学んで、体育と実験以外には出席をとられた記憶があまりなかったからである。「出席をとるんですか」と云ったら、「出席をとらないと出席率が悪くなりますョ」とのこと。こっちはなにも一人いくらで講義を受け持っているわけではなし、よっぽど出席をとるのをやめようかと思ったが、先輩の顔に泥がついてもいけないので、とにかく名簿と首っぴきで名前を読み上げてはシルシをつけてみた。ところがこれがまことに苦労なことで、時間はかかるしザワつくし、それでいて代返をされても全然わからない。そこで二回目からは紙に名前を書かせることにした。もっとも、あとで名前を数えてみると、ザッと目算しておいた数より必らず二～三割は多いのが常であった。おそらく代返ならぬ代サインがかなりあったのだろうと思う。きびしくやるつもりなら筆跡を調べて注意する手もあったのだが、そこまではしないことにした。

ところで、代サインというのは、つまりは本人がはじめから姿をあらわさないわけであるが、なかにはサインだけして脱け出すのがあったようである。ようであるというのは、実はしっかりと現場を確認したわけではないのに、いつのまにか数が減っているからで、どうも察するに黒板のほうを向いて字を書いているスキに出てゆくらしい。

講義は半年単位で、前期は夜間、後期は昼間というパターンであったが、夜間のほうが何といっても学生がバラエティに富んでいる。つまり成績のいいのはすばらしくいいが必らずゼロ点の答案が二枚や三枚はでてくる。授業が終ってから話しかけて来たり、講師室へ来て参考書を聞いて行ったりするのも夜間の学生だけである。学生ストのときは学内を歩いていてプラカードを持った学生たちにでくわし、学生ストの意味や、いわゆる社会人のストとのちがいなどについて、ひとしきり議論をかわすハメになったし、反戦運動の署名をしてくれと云われたこともあったし、とにかく若い諸君のいろんな考え方生き方に触れた。これもまた思いがけない余得であって、とくに現代の若者たちが、行動の規範こそわれわれとはすこし

異なるものの、全般的には意外と礼儀正しいことを知ったのはたいへんよかったと思っている。

試験はごく普通の試験にした。つまりノートや参考書はいっさい見ない、いわゆるクローズド・ブック・テストである。レポートにする手もあったのだが、自分自身レポートはあまり好きでないし、正確な評価ができないような気がしたのでクラシック・スタイルにした。ただし、問題を作るのはけだし大ごとである。二年もすれば学生は完全に入れ替わるのだから、また同じ問題を出してもよさそうなものだが何となくそれではいけないような気がして、結局四年間なんとか同じ問題は出さずにやって来たものの、だんだんに工夫にも限界が来て、もうそろそろお手あげである。

試験がすめば次は採点である。会社で、学校出たての若い連中に試験の話や採点の話をすると「いちど試験を課す立場になってみたいものです」とうらやまれることが多いが、私自身たしかにはじめのうちは問題を作ったり点をつけたりするのが楽しかった。ただしこれまた回を重ねるに従って楽しいどころではなくなって来た。特に答案の多いときは大変で、ある時など三つの教室にわかれて百二十枚の答案が出て来て、土曜日曜で採点が終らず、連日深夜まで「点つけ」に追われたことがあった。

ところで、ある年の試験のとき、まことに困った問題がおきた。あきらかな大まちがいであるのに、一字一句寸分ちがわぬ答案が何枚か出て来たのである。しかも具合の悪いことに、くだんの答案は、その問題を除けばまあまあ出来ていて、しかもその問題以外は「盗作」のようすもみられず、ふつうに採点すればスレスレ合格ぐらいのところだったから余計に困った。揚句のはての解決策として、とにかく一応不合格にしておいて、追試験のときの様子で考えることにしよう、と決めたのだが、いざ追試験をやってみると、マークしておいた連中はひとりも追試験を受けに来ず、みごとに肩すかしを喰ってしまった。私は試験に関してはじめのうち割合に楽観的で、「試験は教師と学生の対決ではなく対話である」という文句を考え出したりして、ひとり悦に入っていたものであるが、こんな事があってからは、どうもそんなキレイごとではすまないと思いはじめた。その名文句も機会があれば学生に披露しようと思っているうちに何となく自分の中で色あせてきて、もはや他人に聞かせようとは思わない。

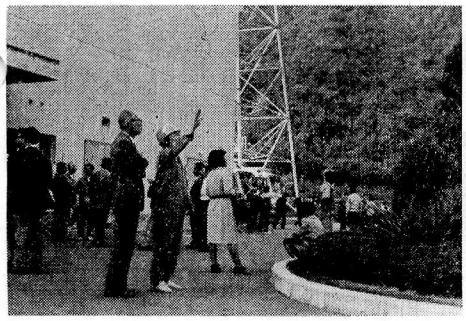
このようにしてともかくも毎週一回、ふだんとはちがった味の空気を呼吸して来た四年間であったが、その間本業のほうでもどうにか人並みに、だんだんと仕事に対する責任の量も多くなり、どうガン張っても会社か学校かのどちらかに不義理をしないかぎり、週一回二時間のおつき合いができなくなって来た。幸い四年間、一回の遅刻も休講もなくやって来たので、その記録がつづいているうちに、誰かにバトンタッチしたいと講師の辞任を申し出たところ、大学の受け容れるところとなり、またもとのサヤに納まった。こうして奮戦記の幕は下りたわけであるが、なかなかに内容豊富で楽しかった四年間であった。いまでもときどき何かの拍子に非常勤講師室の椅子の坐り心地やお茶の味をなつかしく思い出している。

（昭和52年12月）

見学会記事

関西支部家族見学会

関西支部では、10月30日（日）に恒例の家族見学会を行ないました。当日は、松田会長、阪本支部長、前田副支部長をはじめ、会員、会員夫人、会員子弟総勢193名が5台のバスを連ねて、秋色いよいよ濃くなる播州路の風景を楽しみながら、但馬国は朝来にある関西電力奥多々良木揚水発電所へ向いました。発電所では、日曜日にもかかわらず、特別に出勤いたゞいた豊岡電力所長殿、奥多々良木発電所長殿をはじめ関西電力の皆様の御案内で、世界有数の揚水発電所を、制御室、開閉所、地下発電所等普通は仲々見学出来ない所まで、特別の御配慮で見学させていたゞき、会員は勿論のこと、会員夫人や子供さん達からも活発な質問が出るなど非常に熱心に見学させていたゞきました。



発電所の皆様のお見送りを受けて、一同感謝とともに発電所を後にし、朝来山観光センターで、全員などやかに歓談しながら昼食をいたゞきました。

午後は、史跡生野銀山を訪ね、江戸時代の旧坑や資料館の絵巻物、坑内模型等に、永い歴史を学ぶとともに、先人の苦労を偲びました。

当日は朝から曇天で、雨が心配されましたが、幸い発電所に着いた頃には太陽も顔を出し、終日小雨も降らず、暖かい秋の一日を山国の美しい自然とすがすがしい大気の中で同窓生一同家族ぐるみ、楽しく有意義に過すことが出来ました。

すでに夕闇につつまれた京都・大阪に全員無事帰りつき、またの再会を約しながら解散いたしました。

（井土記）

同窓会記事

諸会ノート

昭二会の卒業50周年に当り、11月14日比叡山延暦寺において物故諸先生、学友諸兄の慰霊祭が厳修され、続いて叡山閣において懇親会が開かれ、お招きを受けました詳細は別欄を御参照下さい。

昭和32年卒業の卒業20周年記念同窓会が11月6日、天下の名勝、嵐山対嵐坊にて盛大に開かれお招きを受けました。卒業20年と云えば正に働き盛り、意気軒こうたる皆さんのお話しを聞き、私も若返った感じでした。同級生皆さんの

写真及び感想複写を配布されたことは、幹事西台惇さんの大変な御苦労と感心しました。

11月8日(金)、東京ステーションホテルでの鶴友会(明治・大正年間の卒業)にお招きを受け、皆さんにお目にかかれて欣快に存じました。一同は、数日前帰京された会員一本松珠璣さんのお土産話を興味深く拝聴しました。いつもながら幹事さんの御厚配多謝。

(松田長三郎記)

十四日会　高山大会
日本アルプスを行く

昨年度の十四日会(大正14年・15年卒合同)夫人同伴同窓会は、51年11月10日より二泊三日の伊豆一周の旅、即ち第一日を長岡温泉の元岩崎家別邸であった三養荘で、第二日は西海岸を廻り下田のプリンスホテルで、第三日は石廊崎方面を観光して伊豆急下田駅前散会のコースであった。

本年度は52年10月12日より飛騨の高山で大会を開いた。16時頃迄に高山グリーンホテルに参集、懇談、夜は地元民謡振興会有志による高山民謡を賞しながら、日本料理で一ケ年振りの再会を喜びあった。

13日は8時出発、バスで乗鞍山と新穂高ロープウェイへと向った。幸にも雲一つ無い絶好の天気に恵れ、乗鞍スカイラインよりは白山、穂高連峰、槍岳、御岳山等の雄姿を見渡すことが出来た。又紅葉は平湯峠附近が最も見頃であった。

乗鞍畳平で休憩後下山、正午頃新穂高温泉に到着、ホテル穂高で昼食後二班に分れ、全長3200米のロープウェーで標高2156米の西穂高千石平へ登った。

深山の午後は雲の出るのが普通であるが、本日は雲も無く焼岳の噴煙や周囲の山々が目前に迫るようであった。

かく二ケ所よりの山岳の眺めを満喫して下山。帰りのバス中ではガイド嬢の「野麦峠の織姫の悲哀物語」の熱演を聞きながら17時半ホテルに着いた。

計画の初めは互に古稀を過ぎた年令の者にとり乗鞍と穂高の両方を一日中に登ることは、強行過ぎるとの意見もあったが、日本のモンブランとか、ユングフラウとか弥せられる山である、折角来たものだからと時間的に余裕のあるを幸ひ敢て実行したが、絶好の天気に恵れ無事遂行出来たことは実に好運であった。

夜は18時半より宴会(洋食)前に40分間程一本松氏の「エネルギーと原子力」の講演を拝聴して、エネルギー政策の重要にして且つ必要な事を一層認識した。

14日は9時より市内の飛騨の里、高山陣屋及び屋台会館を見学後料亭洲崎にて宗和流本膳崩しの会席料理に舌鼓を打ち、14時過ぎ来年の会合を楽しみに散会した。昨年は海岸で、本年は山で、ということである。参加者は、夫婦組19、単身4、総数は42名である。

(田中記)

清野　武先生
退官記念行事について

清野　武先生(昭和12年卒)は現在情報工学教室に勤務しておられますが、来る昭和53年4月1日付で京都大学を停年御退官されます。

つきましては記念行事として次のことを計画しておりますのでとりあえずお知らせ致します。

退官記念講演　昭和53年3月22日(水)
退官記念パーティ　昭和53年5月20日(土)

なお各個に御案内は致しませんので詳細を必要とされる向きは御面倒ですが、左記宛ハガキでお問い合せ下さいますようお願い申し上げます。

(世話人代表　坂井　利之)

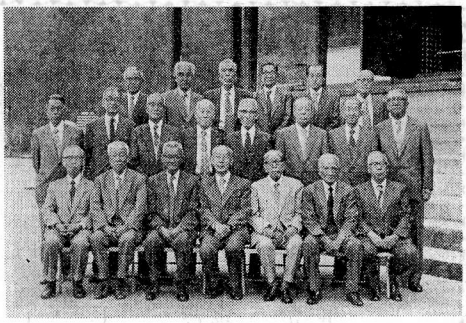
連絡先　〒606 京都市左京区吉田本町
京都大学工学部情報工学教室内
(電話　075-751-2111)

清野　武先生退官記念行事世話人
幹事　萩原　宏(内線5373)
矢島　脩三(内線5372)
池田　克夫(内線5384)
島崎　真昭(内線5397)

昭和二年卒
五十周年同窓会

昭2卒の私達(同期生56名中の生存者31名)は、この春、目出度くも卒業50周年を迎えました。

卒業時は昭和初期の大恐慌が始まった頃で、爾来、満洲事変、大東亜戦争、未曽有の敗戦、朝鮮戦争に続く経済の復興、発展、さらには最近の世界的不況え、昭和50



年間の喜びと悲しみをもろに被って、激動の時代を潜って来ました。ひとつ盛大な記念同窓会を開きたいとの所存でもありましたが、低成長時代も意識され、その他諸般の事情もあって、結局は平凡なプログラムとなりました。

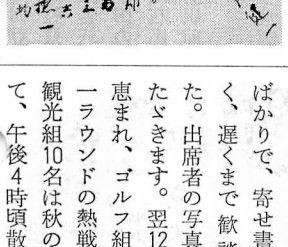
月日　10月14日、15日の両日
場所　京都（比叡山ホテル叡山閣に一泊）

○追悼法会　第一日の昼、比叡山延暦寺・阿弥陀堂で、物故された恩師（鳥養先生ほか8名）と同期生（林重憲君ほか24名）の追悼法会を、松田、羽村両先生と同期生19名が参列して、厳粛に執り行いました。追悼法要は、これまでにも節目ごとに、京都府八幡町・円福寺(20周年)、京都市寺町・天性寺（30周年）、京都市・南禅寺（40周年）、京都市・天龍寺（45周年）などで行なってきましたが、此度はそれぞれの御遺族の消息を、関係者一同が手を分けて調査し、御挨拶状と法会の供養の品々をお送りいたしました。御遺族から大変お喜びいただいたことは望外の幸せであったと思っています。

法会の後、葉上照澄長藺から「九日断食」「千日回峯行」などの貴重な御体験の超荒行の話や、法話を拝聴しました。

○懇親会　第一日の夜は叡山閣で記念の宴会、松田、羽村両先生を囲み、曽ての同窓会のフイルムを映し、故人を偲び五十年の来し方を顧みて、交々談笑の内に数時間を過しました。10月中旬の比叡山の夜にしては珍らしく暖く、寒さを懸念されての品川先生の御欠席が惜しまれました。

○延暦寺見学　第二日は見学でした。延暦寺は特に寺僧の案内で東塔、西塔、横川の三地区の堂塔、伽藍を数多く回遊しました。この中で根本中堂は一山の中心に当り、建物も特異でありますが、御本尊薬師如来の前に、薄暗い中に「消えずの燈明」が三灯光っています。延暦寺創建の伝教大師最澄以来千二百年間燃え続いているとのことで、何となく手を合せたくなる神秘性を醸しています。これを消さぬよう護持するには、随分気を使っていることと思いますが、過去に何度ぐらい消えただろうか、たとえ一回でも消えたとあっては、神秘性も消しとんでしまうだろうなどと、ちょっと野次馬根性を起しながら山を下りました。



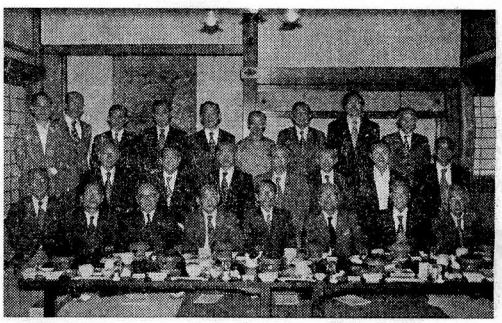
○電気工学教室訪問　近藤先生ほか皆さんを長い時間お待せしながら、予定時間がなくなって、教室に到着、即時退出に近い仕儀となり、誠に申訳けないことでした。学生当時、常時講義を受けた懐しい階段教室に腰かけて（これが最後かも……）、しばし50年の昔に帰ってみたいとも考えていましたが、哀れ、事務室に姿を変えてしまっていました。大学本部の時計台を中心に張り出されていた抗議デモの恒例の幕や看板は、とに角一日も早く消えてほしいなァと思いつゝ正門を出ました。

○仙洞御所参観　現存しているのは庭園が主で、池泉回遊式で可なり広く一巡するのに一時間、紅葉していたら、もう一段と美しかろうと思われました（参観には宮内庁京都事務所の許可が必要）。因みにあの広々とした御苑内には、京都（紫宸殿のある）、仙洞、大宮の三御所があります。

○湯葉料理　この日の昼食は湯葉山巣林庵（阪急電車桂駅の近く）にて湯葉料理、魚肉類はなく、すべて湯葉一式の料理で、珍らしくもあり、風味もあるおいしいと思いました。ここでも故人の思い出話に花が咲きましたが、これで全プログラムを終り解散となりました。50周年が一つの区切りにでもなったのか、一抹の淋しさを感じた解散と思われたのは、私一人の感傷でしたかしら。（瀬川記）

昭和十七年九月卒
十五周年同窓会

5年目毎に京都で開催していたクラス会を今回は関東で開くことになり、11月11日箱根宮の下の富士屋ホテルに参集しました。参集者24名、遠く北海道、四国からの参加もあり、夕食時も話がはずむばかりで、寄せ書等をする暇もなく、遅くまで歓談に過ごしました。出席者の写真を掲載させていたゞきます。翌12日は秋の快晴に恵まれ、ゴルフ組14名は仙石原で一ラウンドの熱戦をくりひろげ、観光組10名は秋の箱根を一周して、午後4時頃散解しました。今回は遠方のこともあり、先生方を御招き出来なかったのは残念でしたが、5年後の又の日を期待しております。（浮田記）



訃報

大10卒　樋口　貞三　52・9・24
講昭5卒　山崎　赳夫
講大12卒　江本　敏式

以上の方々がご逝去なさいました、謹んで哀悼の意を表します。

御詫び

昨年末に発行しました昭和53年度会員名簿に就きまして広告を頂いた賛助会員の内、29社の分を脱落致し大変御迷惑をおかけしました事を深くお詫び申し上げます。ここに改めて名簿追加分として御送り申し上げますので御諒承下さい。（幹事　山本）